



イースター島のモアイ像(チリ)
撮影:波多野武徳氏

Contenido

1. あいさつ
2. 2021年の活動報告
3. スペインぶらぶら歩き
4. 田村先生の追悼文集刊行にあたり
5. 2022年のスペイン
—政治・経済・社会についてのいくつかの私見—



マチュピチュ遺跡(ペルー)
撮影:波多野武徳氏

ごあいさつ

毎年の総会にて発行していた「Boletín(ボレティン)」は今号で8号となりました。8年前、この会報誌のタイトルをどうするか、について田村先生や編集に関わるメンバーと話し合ったことを、昨日のここのように思い出します。色々な案が出ましたが、結局、平凡な「長崎スペイン世界友の会 Boletín(ニュースレター)」という名に落ち着きました。

毎号、1年間の活動内容を記載しておりますが、今年はいつものような例会を中心とした活動とは違っていています。前半は新型コロナウイルス感染症が広まっていたため、例会の開催も十分できませんでした。また、後半は追悼文集の編集についての打ち合わせ、田村先生を偲ぶ会の開催についての話し合いが主な活動となりました。

その他の内容に関しましては、大黒柱の田村先生が書かれるスペイン世界や、長崎とスペイン世界にまつわる記事がありませんが、会員の皆様の寄稿により、興味深い内容を掲載することができております。

追悼文集発行、偲ぶ会の開催が、このスペイン世界友の会の一つの区切りとなるのではないかと思います。この会報誌「Boletín(ボレティン)」についても、今後新たな企画などが加わることを願っております。

2021年度(2021.10～2022.9)活動報告

1.月例会(各月第4土曜日14:00～16:00実施)

年月日		講師(敬称略)	内容
2021	10		総会
2021	10	徳山光	長崎県美術館所蔵ピカソ作品について
2021	11	田中彰	マドリードぶらぶら歩き
2021	12		クリスマス会
2022	1		例会中止
2022	2		例会中止
2022	3		例会中止
2022	4	24	Francisco Torregrosa エルナン・コルテスの遠征について
2022	5	22	波多野武徳 アメリカ大陸14カ国旅行記
2022	6	25	田村先生を偲ぶ会、追悼文集準備
2022	7	23	田村先生を偲ぶ会、追悼文集準備
2022	8	27	田村先生を偲ぶ会、追悼文集準備
2022	9	24	田村先生を偲ぶ会、追悼文集準備

2. スペイン語教室

講師: Francisco Torregrosa

開催日時: 毎月第二土曜日14時から16時まで

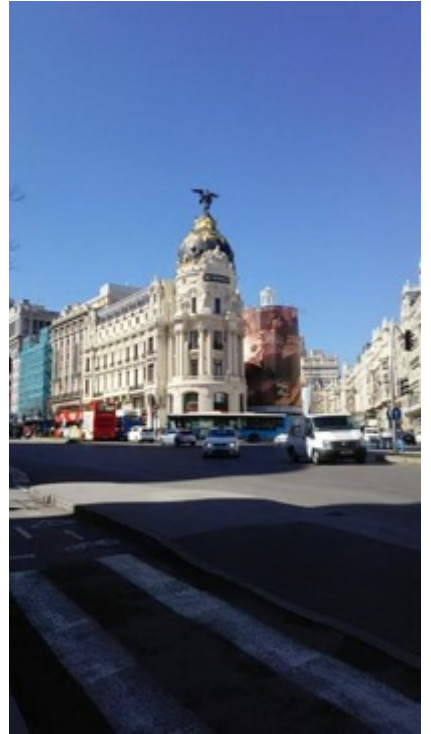
会費: スペイン世界友の会会員500円 会員以外1000円

昨年度のスペイン語教室実績

2021年	12月	9日
2022年	1月	15日
	3月	22日
	4月	9日
	5月	14日
	6月	11日
	7月	16日
	8月	26日
	9月	10日

田中彰氏の「スペインぶらぶら歩き」

1970年代のスペイン 其の3 ベラスケス「ラス・メニーナス」考察



1656年、スペインはマドリッドで画家ベラスケスは「ラス・メニーナス」(宮廷の侍女たち)を描いている。

ベラスケス作の「ラス・メニーナス」はとっても有名な絵なのでどんな作品なのかすぐに調べられる。登場人物を紹介するので参照してね。

アンダルシア地方都市セビリアからマドリッドの王宮に呼ばれたベラスケス57歳のとき、フェリペ4世時代のもと今までに存在しないような絵にとりかかった。

「ラス・メニーナス」とは王女マルガリータの両脇に描かれているご婦人達(宮廷の侍女たち)のことであり、身分の高い貴族の出身者で、王女の世話役である。むかって左側がマリア・アグスティーナ・サルミエント、右側がイサベル・デ・ベラスコと謂う若いご婦人がた、因みに右側下の方に描かれている矮小のご婦人がマリ・バルボラ、犬を蹴る青年がニコラシート・ベルトウサト、蹴られる犬の名はモーゼ。右中央あたりがマルセラ・デ・ウリョア婦人とディエゴ・ルイス・デ・アンコナさんで、いちばん後ろにホセ・ニエト。むかって左側、どでかいキャンバスに向かうおじさんが画家ベラスケスとなっている。真ん中の鏡に映るのが、フェリペ4世とマリアナ・デ・アウストウリア王妃。で、何と言ってもこの絵の主役の5歳のおチビちゃんマルガリータ王女となっている。皆それぞれの人生を全うしていく、若くして亡くなってしまおう方、長生きの方、歴史の渦の中でそれぞれが浮世店。

「ラス・メニーナス」はフェリペ4世とマリアナ・デ・アウストゥリア王妃の肖像画である。描かれている人々、舞台装置、構図、鑑賞者の見る位置(鏡を使ったり…)を考慮に入れて鑑賞するという旧態依然のやり方だと、ずっと「謎の絵」のまま、この「ラス・メニーナス」はふわりふわりと鑑賞者の周りで飛び回ることになる。フェリペ4世とベラスケスの友情は大変なもので信頼感は凄いものであった。フェリペ4世は政治事にはまるっきしだが芸術を愛し、審美眼の持ち主で、なによりめっぽう女好き、かたやベラスケス師はといえば絵描きバカの堅物、イタリアでの一回きりの浮気だけ、そんな二人はなぜかウマがあった。何故ウマがあったかって、合ってしまったのだからしょうがない。この二人、芸術を愛すと謂うことではツウカアの仲である。「フェリペ4世、ちょっといいですか？」

「なんだい、ディエゴ(ベラスケス)」

「あなたの肖像画の件なんです、今までみたいに当たり前の、顔、かたち、を写しても面白くないと思いますんで貴方の内面を表現した肖像画を描きたいと考えますがよござんすか？」

「いいねえ、永年のつきあいでツウカアの俺たちだ、任せるよ。」

…

ベラスケスはフェリペ4世になり代わってキャンバスに筆を走らせた、「フェリペ4世は、おチビちゃんの王女マルガリータを溺愛しているから、それを絡めて彼のこころの中を描いてみるか、審美眼を持ち、友情に厚く、めっぽう女好きときてる。ほっほう、面白くなってきたぞ、フェリペ4世のこころの肖像画だ。」

…

「できあがったかい、ディエゴ(ベラスケス)。オオ、これは、俺自身だ。おれのこころが表現されているぜ。さっそく朕の部屋に持って行ってずっと飾っておくぜ。」

ざっと言うところこんな感じである。

芸術(アート)の道を歩く人の前には何もない、なにも存在しない。

師ベラスケスの「ラス・メニーナス」はその道程を示してくれている。若き芸術家よ、自身の個性などに頼るなど。



2022年9月30日

橋本 和正

去る9月24日、田村先生の追悼集がようやく完成いたしました。先生が亡くなられたのが2021年2月10日、事務局から関係者の皆様に追悼文の寄稿をお願いしたのが同年4月初旬でしたから、刊行までに約1年半を要したことになります。

この間、追悼集はいついつ出来るのか、と訝しんでおられた方も多いかと想像します。そこで、編集に携わった一会員の視点から、刊行までの経緯をごく簡単に記します。

まず、今年の5月14日、パコさんのスペイン語講座が終わった後、どなたかから「追悼集の編集は進んでいるの？」と声が上がりました。しかし講座参加者(事務局含む)で状況をきちんと把握出来ている方はおられませんでした。そこで急遽、5月28日に追悼集の打合せが開催されることとなりました。

私は、友の会入会からまだ3年、生前の先生とのお付き合いもわずか1年半の所謂ペーペーです。そのため、追悼集の編集に自ら関わるつもりは無く、遠く外野席から眺める応援団の意識でこの打合せに参加しました。しかし、そこでの議論を聞いているうちに、①旗振り役が誰なのかはつきりせず、会員の役割分担も不明瞭、②年配会員が多いため、PCを使いこなせる方がいない、の2点が編集作業遅延の大きな原因だろうと感じました。打合せ参加者を見渡しますと、その中でPC操作に最も通じているのは私のようです。そこで僭越ながら、旗振り役とPCでの編集作業は私が引き受け、他の方々にはそれぞれ役割を担っていただくようお願いをいたしました。つまり、少々大げさですが、外野席のおっさんが、突如、プレイングマネージャーになったようなものです(当方、野球キチガイなのです、お許しください…)。

その際、「原稿は既に集まっているのよ」と聞いていたため、「ならば其々のファイルをPDF化して連結すれば作業は終わりだな」と不肖プレイングマネージャーは想像しておりました。ところが、いざ始めてみますと、意外に複雑な作業の連続です。フォント、余白、追悼文の体裁がバラバラ、誤字脱字をどうするか、活動記録に抜けが多い、印刷品質とコストのバランスを如何に図るか、等々。

6月からは定期的に編集打合せが開催されるようになり、「アレやコレも追悼集に加えたい」といったご意見も多く頂きました。それに伴い、やや面倒な作業が発生することもありましたが、当初案には無かった「ご家族からのメッセージ」が加わることにもなりました。これは、役割分担が明確化され、多くの方が積極的に打合せに参加してくださるようになったからこそでして、ある意味、大きなホームランだったと思います。

その後、8月に原稿が完成、9月に入りキンコースズさんに綺麗に印刷していただき、無事追悼集の刊行と相成りました。事務局の山崎さんからは「先生が橋本さんに移っているんじゃないの？」と過分なお褒めの言葉を頂きましたが、旗振り役を立派に務められたのかは皆様のご判断に委ねたいと思います。さっぱりスペイン語の上達しない私としましては、旗振り役よりむしろ語学力の点で、以下の有名なフレーズの如く、天国の先生に引き続きサポートをお願いしたいところです。

Y todos fueron llenos del Espíritu Santo. Y predicaban con valentía la palabra de Dios. (Hechos de los Apóstoles 4:31)

皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。(使徒行伝 4.31)

最後に、追悼集作成にご協力いただいた皆様に心よりお礼を申し上げます。この刊行をもって不肖プレイングマネージャーは一旦バットを置かせていただきますが、外野席のおっさんに戻ることは許ませぬぞ、との視線も感じております。ですので、今後もヒットが打てるよう、また天国の先生にも喜んで頂けるよう、友の会運営に引き続き協力して参ります。どうぞ宜しくお願いいたします。

2022年のスペイン —政治、経済、社会について、いくつかの私見—

スペイン友の会会員 Francisco Torregrosa

私は、長崎でのブルーインパルスのエキシビジョンを見た後に、この原稿を書いています。

ここで、スペインの未来はどうなるのか、について語れば、さぞかし面白いに違いないでしょう。でも、私は水晶玉を持っていないので、未来がどうなるかはわからないし、水晶玉からお告げを得られる術を持っているわけではないので、今後のスペインのことを考えるために、政治的、経済的、社会的から見た側面を簡単に説明することにとどめようと思う。スペイン世界友の会の友人たちがお望みならば、2022年のスペインの政治的、経済的、社会的な側面について私見を語ることにしよう。

スペインでは、政治的な問題領域は次の3つのレベルで検討されなければならない。その3つとは自治体、国、国際的なレベルである。

自治体レベルで見ると、2022年はカタルーニャやバスクの独立運動と中央政府との間の緊張関係が緩和されたことがある。カタルーニャ国民の日はディアダ(カタルーニャのナショナルデー、9月11日)、と呼び、ディアダはカタルーニャの独立運動の高まりのバロメーターの役割を果たす日となる。「カタルーニャ国民の日」には、バルセロナで約15万人しか集まらなかった。(過去10年の平均は100万人を超えていることを念頭に置いておく必要がある)。バスクのナショナリズムのバロメーターであるアベリ・エグナ(バスク祖国の日)は、バスク地方とナバラの主要都市で数千人しか集まらなかった(90年前にビルバオで開催された第1回アベリ・エグナには、約6万人が参加したそうだ)。

国政レベルでは、今年行われた2つの地方選挙がある。カスティーリャ・イ・レオン州議会選挙とアンダルシア州議会選挙で、民衆党(PP)が勝利し、社会党(PSOE)が2位となった。残りの国民党であるウニダス・ポデモス、ボクス、シウダダノスは、数十年にわたってスペイン政治を支配してきた二大政党制を打破することができないでいる。

国際レベルでは、欧州連合(EU)と北大西洋条約機構(NATO)の一員であるスペインは、この2つの組織の後を追うように、今年はウクライナ紛争の影響でロシアとの政治・経済関係が冷え込む結果となった。国際関係の分野でも、ペドロ・サンチェス首相が、西サハラ紛争終結のための最良の選択肢は同地域のモロッコへの自治区としての併合であると認識したことから、西サハラを主権国家として認めているアルジェリアは、スペインへの天然ガス供給を削減した(アルジェリアは長年、地中海を横断する2本のガスパイプラインを通じてスペインへの天然ガスの主要供給国になっていた)。

経済面では、2022年はスペインにとって光よりも影が多い1年だった。唯一の明るい話題は観光であった。この夏のホテルの稼働率は80~90%で、パンデミック以前の水準に達している。マイナス部分について述べると、年間10%のインフレ、過去12ヶ月で2%以上の金利上昇(これにより住宅ローンの平均額は年間約2000ユーロ上昇)、ユーロ下落によるエネルギー価格の上昇、ロシアへのブーメラン制裁...そして忘れてはならないのが、今年、現役人口の12%を超えたスペイン経済の慢性的な失業問題である。

社会面では、スペインが直面する主な課題は高齢化である(2033年には人口の25%が65歳以上になると予測されている)。この流れを変えるため、2022年に入管法が改正され、観光や農業などの分野で働くことを希望する外国人の入国が容易になるなどの措置がとられました。現在、スペインの人口は4,750万人で、そのうち550万人が外国人居住者である。もうひとつの社会的側面である宗教的感情との関連では、CIS(Centro de Investigaciones Sociológicas)による最新の調査(2022年9月)によると、国民の53.8%が自らをカトリック教徒であると表明している(1978年にはこの割合は90%であった)。

最後に、スペイン社会におけるパンデミックの影響のひとつである、民間企業から公共団体に、労働者が移動したことについて触れておこう。その主な理由は、「給料は安い、生活の質が高いから」である。

España en el 2022: algunos aspectos políticos, económicos y sociales.

Escribo estas líneas tras asistir a la exhibición en Nagasaki de la escuadrilla acrobática Impulso Azul.

Sin duda, hubiera sido más interesante hablar sobre el futuro de España –quo vadis-, pero como no dispongo de una bola de cristal me limitaré a dar unas pinceladas de los aspectos políticos, económicos y sociales de la España del 2022 para que los amigos de la Asociación saquen, si así lo desean, sus propias conclusiones.

En España, **la esfera política** debe examinarse teniendo en cuenta tres niveles: el autonómico, el nacional y el internacional. En **el nivel autonómico**, el año 2022 ha visto una disminución de la tensión entre el Gobierno Central y los movimientos independentistas de Cataluña y el País Vasco: La Diada o Fiesta Nacional de Cataluña (11 de septiembre), termómetro que sirve para medir la fuerza del nacionalismo catalán, tan sólo reunió a unas 150.000 personas en Barcelona (hay que tener en cuenta que la media de los últimos 10 años ha superado el millón de participantes); el Aberri Eguna o Día de la Patria Vasca, barómetro del nacionalismo vasco, congregó únicamente a unos miles de personas en las principales ciudades del País Vasco y Navarra (el primer Aberri Eguna que se celebró en Bilbao noventa años atrás, contó con la asistencia de unas 60.000 personas).

Castilla y León, y Elecciones al Parlamento de Andalucía), han dado la victoria al Partido Popular (PP) dejando en un segundo lugar al Partido Socialista Obrero Español (PSOE). El resto de partidos de ámbito nacional, Unidas Podemos, Vox y Ciudadanos, no han podido romper el bipartidismo que domina la política española desde hace décadas.

En el nivel internacional, España, miembro de la Unión Europea (UE) y de la Organización del Tratado del Atlántico Norte (OTAN), sigue la estela de estas dos Organizaciones, lo que se ha traducido este año en un enfriamiento de las relaciones políticas y económicas con Rusia, derivado del conflicto bélico en Ucrania. También en el ámbito de las relaciones internacionales, el reconocimiento por parte del primer ministro, Pedro Sánchez, de que la mejor opción para poner fin al conflicto del Sáhara Occidental es la anexión –como región autónoma- de este territorio a Marruecos, ha llevado a Argelia –que reconoce al Sáhara Occidental como un país soberano- a reducir el suministro de gas natural a España (Argelia ha sido durante muchas décadas el principal suministrador de gas natural a España a través de dos gaseoductos que atraviesan el Mediterráneo).

En el terreno económico, el 2022 ha sido para España un año con más sombras que luces. El único dato esperanzador ha sido el turismo, principal motor de la economía española: este verano la ocupación hotelera se ha situado entre el 80 y el 90%, nivel anterior a la pandemia. En el otro lado de la balanza los datos económicos son muy preocupantes: inflación anual del 10%; subida de los tipos de interés superior al 2% en los últimos 12 meses (lo que ha encarecido la hipoteca media

en unos 2.000 euros al año); alza del precio de los productos energéticos debido a la caída del euro y a las sanciones boomerang impuestas a Rusia ... y no nos olvidemos del paro crónico de la economía española que este año supera el 12% de la población activa.

En lo **social**, el principal reto que afronta España es el **envejecimiento de la población** (la previsión es que en el año 2033 el 25% de la población será mayor de 65 años). Para revertir esta tendencia, en el 2022 ha tenido lugar la reforma de la Ley de Inmigración para facilitar, entre otras cosas, la entrada al país de personas de nacionalidad extranjera que quieran trabajar en sectores como el turismo o la agricultura. En la actualidad, España cuenta con una población de 47 millones y medio, de los cuales 5 millones y medio son residentes de nacionalidad extranjera.

En relación a otro aspecto de lo social, el **sentimiento religioso**, las últimas encuestas del Centro de Investigaciones Sociológicas (CIS) –septiembre de 2022– indican que el 53,8% de la población se declara católica (en 1978 este porcentaje era del 90%).

Y, para terminar, una pincelada acerca de uno de los **efectos de la pandemia** en la sociedad española, a saber, el desplazamiento de empleados del sector privado hacia el sector público ... la principal razón esgrimida para tomar esta decisión: aunque el salario es menor, la calidad de vida es mayor.

<長崎スペイン世界友の会>

入会金:2,000円、年会費:1,000円。関心のある方は、下記にご連絡ください。

連絡先:事務局所在地:

〒852-1855 長崎市中園町17番14号「カサ・イベリア」内

電話・Fax:095-844-3318

メール:<mailto:info@amigos-mundo-hispanico.jp>

URL :www.amigos-mundo-hispanico.jp